

## 修正内容一覧

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前				修正後				備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報			
24A6062	2,3-ジメチルアニリン	87-59-2	水生環境有害性 (長期間)	区分1	環境	警告	長期継続的影響によって水生生物に非常に強い毒性	慢性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく(BOD:3%(既存点検,1990))、甲殻類(オオミジンコ)による21時間NOEC=0.1mg/L(環境省リスク評価第7巻,2009:NITE/CERI有害性評価書 2005)であることから、区分1とした。	区分1	環境	警告	長期継続的影響によって水生生物に非常に強い毒性	慢性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく(BOD:3%(既存点検,1990))、甲殻類(オオミジンコ)による21日間NOEC=0.1mg/L(環境省リスク評価第7巻,2009:NITE/CERI有害性評価書 2005)であることから、区分1とした。	2014.2修正
24A6085	コハク酸ジメチル	106-65-0	水生環境有害性 (長期間)	区分3	—	—	長期継続的影響によって水生生物に毒性	信頼性のある慢性毒性データが得られていない。急速分解性がなく、急性毒性区分3であることから、区分3とした。	区分外	—	—	—	信頼性のある慢性毒性データが得られていない。急性毒性区分3であるが、急速分解性があり(BODによる分解度:90%(既存点検,2000))、生物蓄積性もないと推定される(LogKow = 0.35(NITE総合検査,2012))ことから、区分外とした。	2014.2修正
24A6085	コハク酸ジメチル	106-65-0	水生環境有害性 (急性)	区分3	—	—	水生生物に毒性	魚類(ゼブラフィッシュ)による96時間LC50=50-100mg/L (IUCLID, 2000)であることから、区分3とした。	区分3	—	—	水生生物に有害	魚類(ゼブラフィッシュ)による96時間LC50=50-100mg/L (IUCLID, 2000)であることから、区分3とした。	2014.10修正
24A6137	2-ピリジンチオール-1-オキシドの亜鉛塩 (別名:ジクピリチオン)	13463-41-7	眼に対する重篤な 損傷性/眼刺激性	区分2A	—	—	—	ウサギの眼にに本物質10 mgを適用した試験で、重度の結膜刺激と角膜混濁(severe conjunctival irritation and corneal opacity)を起こしたとの結果(PATY (6th, 2012))に基づき、区分2Aとした。	区分2A	感嘆符	警告	強い眼刺激	ウサギの眼にに本物質10 mgを適用した試験で、重度の結膜刺激と角膜混濁(severe conjunctival irritation and corneal opacity)を起こしたとの結果(PATY (6th, 2012))に基づき、区分2Aとした。	2014.10修正
24B6509	シクロヘキシルアミン	108-91-8	特定標的臓器毒性 (単回暴露)	区分1(神経系、心血管系)、区分3(気道刺激性)	感嘆符	警告	臓器(神経系、心血管系)の障害のおそれ	作業環境中の事故により本物質の蒸気にはばく露された3人の労働者のうち、1人は約1時間のばく露で情緒不安、心悸亢進、不眠を訴え、2人目は強いアルカリ溶液と共に本物質が顔にはねかかき、嘔気、繰り返しの嘔吐、支離滅裂な話し方、散瞳が認められたが、3人目は嘔気のみであった(DFGMAK-Doc. 22 (2006))。本物質は神経毒と考えられており、中枢神経系の抑制を起こすとの記載(PATY (5th, 2001))、また、脊髄の運動神経中枢および髄質に作用し、投与後数時間で遅発性の痙攣をもたらすとの記載(JECFA 202 (1970))もあることから、区分1(神経系)とした。一方、健康男子ボランティアに5または10 mg/kgを単回経口投与後1時間で、収縮期と拡張期の平均血圧が用量依存的に有意な増加を示し、この血管収縮作用は心拍数の僅かな減少も伴った(DFGMAK-Doc. 22 (2006))と報告されていること、本物質の作用として交感神経のみならず、心血管にも言及がある(DFGMAK-Doc. 22 (2006))ことから、区分1(心血管系)とした。さらに、本物質の主な急性影響には気道刺激性が含まれている(ACGIH (2001))ことから、区分3(気道刺激性)とした。	区分1(神経系、心血管系)、区分3(気道刺激性)	健康有害性感嘆符	危険警告	臓器の障害(神経系、心血管系)呼吸器への刺激のおそれ(気道刺激性)	作業環境中の事故により本物質の蒸気にはばく露された3人の労働者のうち、1人は約1時間のばく露で情緒不安、心悸亢進、不眠を訴え、2人目は強いアルカリ溶液と共に本物質が顔にはねかかき、嘔気、繰り返しの嘔吐、支離滅裂な話し方、散瞳が認められたが、3人目は嘔気のみであった(DFGMAK-Doc. 22 (2006))。本物質は神経毒と考えられており、中枢神経系の抑制を起こすとの記載(PATY (5th, 2001))、また、脊髄の運動神経中枢および髄質に作用し、投与後数時間で遅発性の痙攣をもたらすとの記載(JECFA 202 (1970))もあることから、区分1(神経系)とした。一方、健康男子ボランティアに5または10 mg/kgを単回経口投与後1時間で、収縮期と拡張期の平均血圧が用量依存的に有意な増加を示し、この血管収縮作用は心拍数の僅かな減少も伴った(DFGMAK-Doc. 22 (2006))と報告されていること、本物質の作用として交感神経のみならず、心血管にも言及がある(DFGMAK-Doc. 22 (2006))ことから、区分1(心血管系)とした。さらに、本物質の主な急性影響には気道刺激性が含まれている(ACGIH (2001))ことから、区分3(気道刺激性)とした。	2014.10修正